

古河の歴史と蘭学者・鷹見泉石

●古河のまちを歩く・その2!

10時20分、古河総合公園を出て、「古河歴史博物館」に向かいます。バスを置ける駐車場を確認して、石畳を歩くと間もなく博物館【写真①】です。

* *

◆古河歴史博物館



古河歴史博物館は、古河城の諏訪曲輪(出城)跡地に建てられている。建築家の吉田桂二が設計し、1992年の日本建築学会賞

(作品賞)、1996年の公共建築賞(建設大臣表彰・文化施設部門)を受賞した。

本館入口がある展示ホールにはオランダ製のストリートオルガンが置かれている。江戸時代の天保3年(1832年)に雪の結晶の観察図鑑「雪華図説」を刊行した古河藩主土井利位や、その家老であった鷹見泉石がオランダから知識を得たことを象徴している。

展示室1では、洋学に造詣が深かった古河藩家老・鷹見泉石が遺した資料を展示。当時のオランダ地図や世界地図・日本地図・古河藩領内図などの国内外の古地図・古書・絵画・版画類、輸入陶器・ガラス瓶類、織物、温度計・製図器等の理化学機器などからなり、泉石の幅広い関心分野がうかがえる。その他にも、「日光駅路里数之表」は、将軍の日光社参に備えて泉石が作成した宿駅間距離の一覧表。日光～江戸間のものとしては日本初の距離早見表である[2]。「大塩平八郎召捕棒」は、藩主・土井利位が大坂城代の際、泉石が大塩平八郎の乱鎮圧を指揮したときのものである。

展示室2では、中世の古河公方、近世(江戸時代)の古河藩、近代の製糸工業隆盛や田中正造とのゆかりなど、古河の歴史を概説。1/350縮尺の精密な古河城下模型(江戸時代後期)も展示されており、当時の城下町の町並みとともに、現在、城跡がほとんど残されていない古河城の姿が再現されている。

展示室3では、幕末から明治期にかけて活躍した古河ゆかりの文化人とその作品を展示。女流南画家の奥原晴湖、伝統的絵画から浮世絵・戯画・新聞の挿絵など多岐にわたる分野の絵画を手がけた絵師・河鍋曉斎、奥原晴湖の師であり古河画界の祖となった枚田水石、書家・小山霞外などが紹介されている。

【ウィキペディア・フリー百科事典】

* *

◆雪の殿様 土井利位

土井利位【写真②】は20年にわたり観察した雪の結晶を「雪華」と名付け、天保3年(1832)その成果86種を収録する『雪華図説』【写真③】を刊行しました。同11年に刊行される『続雪華図説』と合わせ、利位によって著された日本最初の雪の自然科学書として高い評価を得ています。



寛政元年(1789)5月、土井利徳の四男として、刈谷(現愛知県刈谷市)に誕生しました。刈谷の土井家は、始祖利勝の次男利長にはじまる分家で、刈谷時代の利位を知る手がかりは、「部屋住」の身ゆえか、ほとんど伝わっていません。

嫡子でなかった利位に大きな転機が訪れたのは、彼の25歳のときでした。本家にあたる古河藩主土井利厚の養子に迎えられ、このときはじめて、学問・芸術にたいする彼の資質を開花させる機会がおとずれたといえるでしょう。

文政5年(1822)、34歳のとき、利位は、養父の死去にともない家督、古河藩8万石を襲封。以後、彼は、天保5年(1834)から同8年まで「大坂城代」を、同年「京都所司代」、翌年には「江戸城西之丸老中」と、幕府の要職を歴任しています。

天保10年(1839)本丸老中に昇進、水野忠邦を助けて天保改革に尽力。同14年、改革の失敗から失脚した水野忠邦のあとをうけて老中首座となり、幕府財政の再建につとめました。翌年、老中を辞任した利位は、藩領を巡村、古河藩政改革をおこないました。嘉永元年(1848)、60歳で病没。

◆「雪華図説」

本文に記される観察法を大まかに紹介すると、

1. 雪が降りそうな夜、黒地の布を屋外に置いて冷却する。
2. 降雪をその布で受ける。
3. 形を崩さないように注意して、ピンセットで取り、黒漆器に入れる。
4. 吐いた息が試料にかからないよう注意しつつ、「蘭鏡」(オランダから渡来した顕微鏡)で観察する。整った形の結晶が観察されるには、大きな結晶が形成され、なおかつ牡丹雪のように癒合しない-10℃から-15℃の気温が必要となる。当時の寒夜に顕微鏡観察を行うには、かなりの苦労があったという。

* *

◆蘭学者・鷹見泉石

鷹見泉石は家老として、藩主土井利位（としつら）に仕えた古河藩士。利位が大阪城代であった折りに「大塩平八郎の乱」で鎮庄にあたるなど、大きな働きをしました。また、優れた蘭学者でもあり、数多くの研究資料の収集にあたりました。【写真④：渡辺華山筆 国宝『鷹見泉石像』東京国立博物館蔵】



十郎左衛門忠常といい、泉石は引退後の名前です。天明5年（1785）6月29日、土井氏代々の家臣、鷹見忠徳の長男として、当時、四軒町といったこの地に生まれました。11歳より藩主土井利厚・利位の二代に仕え、ついには江戸家老に進み敏腕をふるいました。とりわけ藩主利位の「大塩の乱」鎮定・京都所司代から老中への昇進と幕政参画など、その陰にはつねに泉石の補佐が与って大きかったです。

蘭学（らんがく）を志し、利位の『雪華図説（せっかすせつ）』の刊行をたすけ、晩年、自らも日本初の『新訳和蘭国全図』を出版しました。かたわら、学者・文化人と広く交わり、オランダ商館長よりヤン・ヘンドリック・ダップルの蘭名を贈られ、開明的外国通といえます。安政5年（1858）7月16日、古河長谷の屋敷で73歳で没しました。市内横山町の正麟寺（しょうりんじ）に眠る。

【写真と文は「こがナビ」より】

* *

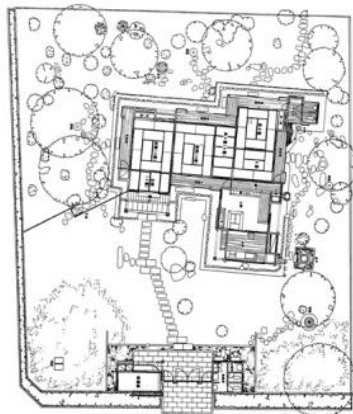
博物館で鷹見泉石の偉業と古河の歴史を約40分見学し、11時10分に出ました。目の前には「鷹見泉石記念館」【写真⑤】があります。



* *

◆鷹見泉石記念館

鷹見泉石記念館は、歴史博物館の別館として開館されました。もともとは古河藩の武家屋敷でしたが、鷹見泉石が晩年を送った住まいで古河に現存する唯一の武家屋敷です。



* *

◆奥原晴湖画室「繡水草堂（しゅうすいそうどう）」



南画家奥原晴湖は、慶応元年（1865）以来、活動の場としていた東京上野の摩利支天横町の「墨吐烟雲楼」

が、明治24年（1891）、鉄道用地となってしまう、旧古河藩領でもあった埼玉県熊谷へ新たな活動拠点を



をつくりまします。これが繡水草堂。はじめ繡仏草堂、のち寸馬豆人楼とも称した画室です。この移転については、西欧文化の興隆の一方で、南画をはじめ東洋文化をかえりみない風潮を思っるとの諸説があります。いずれにしても晴湖は



中央画壇とは距離をとって、自らの画の道を志したのでしょう。大正2年（1913）に晴湖は没し、画室は主を失います。そこで、晴湖のおいにあたる池田多喜雄氏によって昭和4年、誕生地である池田家の屋敷地内に移されました。平成20年、故奥原ミチ子氏の遺志により、奥原晴湖画室の寄附申し入れがあり、歴史博物館南側に移築いたしました。【写真⑧：「芦雁図」(1880年)】

昭和4年に古河へ移築されたのは、熊谷にあった画室の一部ですが、今回の移築工事にあたっては、すべてではありませんが、熊谷にあった当初のかたちをなるべく再現いたしました。庭石の一部に、古河城の礎石が再利用されています。蔵では奥原晴湖と画室についてパネルで紹介しています。また、座敷はお茶会等に貸し出しをしています。

* *

「鷹見泉石記念館」「繡水草堂」を見学し、こうした人々が輩出された背景も知ることができました。そして、歴史的に価値のある建物を150年近くも維持してきたことで古河市の文化度の高さを感じます。当日は、ボランティア・ガイドの方にご案内いただく予定です。